ラオスのこども通信

56号
2012年12月発行
ラオスのこども
30周年

発行：(認定)特定非営利活動法人 ラオスのこども

- 先生たちの悩みに応えて ▶ P.1
- はじめる・つながる・つくりだす [2012.7–12]
  ラオス発 ▶ P.2　日本発 ▶ P.3
- 「勉強会」報告 ▶ P.4
- メコンのほとり「祭」▶ P.4

先生たちの悩みに応えて

もっと楽しい子どもセンターのために

3月にサイヤブリ県の子どもセンター4か所を巡回し、各センターが抱えている悩みを聞きました。先生たちは「最近できたゲームセンターに子どもたちが流れていってしまう。新しいあそびやアクティビティを始めたいけれど、何をやったらいいかわからない」「想像力にまかせて自由にお絵描きさせたいけれど、やり方がわからない」「講師を雇う費用、遊び道具や文房具を購入する予算がない」といった課題を抱えていました。10月、こうした先生たちの悩みに応え、子どもにとってさらに楽しい場所にするために、当会は子どもセンター運営能力強化研修を実施しました。

研修では、自立し安定したセンター運営のための広報や資金調達、新しいあそびのノウハウを先生たちに身につけてもらうため、(1) 地元で活動への理解を集める方法・助成金申請のいろは、(2) 想像力を膨らませる絵本の読みきかせ・アート（お絵描きや工作）、(3) 合唱と演劇、の三部構成で、各テーマ2日ずつ、全6日間の盛りだくさんの研修を実施しました。講師は、子どもセンターに立ち上げから関わってきた当会顧問のダラーやスタッフ、タイの絵本作家のプリダーさん、ムッさん、ヴィエンチャン子ども教育開発センターの人気講師のヴィッキーさんでした。

読み聞かせ。子どもも先生も楽しんで

子どもが先生に教える姿も

研修会場は、当会ラオス事務所の併設図書館。お昼になれば、目の前の学校の中学生たちが群れをなしてやって来て、土曜日には小学生がぞろぞろとやって来る会場で、大人も子どもも一緒にワークショップに参加しました。

最初の2日は、各々のセンターの特徴や魅力を考え、課題を共有し、他のセンターの課題攻略法に耳を傾け、最後に助成申請書や報告書作成の練習をしました。初めての取り組みに少々戸惑いながらも毎晩出される宿題とも格闘していました。3日目以降は、最初の2日の眉間にしわの寄った面持ちはどこへやら、休憩時間も返上して工作に夢中になり、ある時は大きな歌声を張り上げ、これが先生たちの得意分野なのだとあらためて納得しました。

4日目の土曜日は、子どもが先生よりも前の最前列に小さいテーブルを置き陣取り研修に参加しました。飲み込みの遅い先生に子どもが教える姿もあり、先生と子どもが一緒に参加するとても楽しい幸せなワークショップでした。今、たくさんの新しいあそびと運営ノウハウを学んだ先生たちがセンターでその成果を発揮していることと思います。次の巡回訪問で、新しいスキルと自信を身につけた先生と子どもたちに会えるのが楽しみです。（秋元波／東京事務所スタッフ）

支援：庭野平和財団

詳細は、ラオスのこどもホームページのスタッフ通信ブログ「充実した6日間」「いつもとはちょっと違うワークショップ」をご覧ください。

お絵描きに挑戦する先生

ラオス発

シェンクワン県、学校図書室開設とフォロー視察

9月18～21日、北部のシェンクワン県にある中高学校の図書室開設が行われました。開設は1校に2日間費やし、2校の開設です。

これまでは事務作業(図書振り分けシールを貼る、図書カードを入れる袋を貼る、など)に多くの時間を割いていましたが、それを短縮し、図書室運営や図書を使用したアクティビティの方法を伝える時間を長くとることにしました。

1日目の開設式にはたくさんの生徒や先生が集まり、なかには歌で歓迎してくれた学校もありました。ラオスのこどものスタッフは棚づくりや本の分類、図書室運営方法を伝えました。2日目は、繰り返し読まれて破損してしまった本を長く使えるように修復する方法を指導したり、子どもたちが本に親しめるように本を活用した劇や歌などのアクティビティの方法を伝え、実際に先生方を対象に行いました。

各学校には図書室担当の先生がおり、その先生を中心とし、積極的に取り組まれました。アクティビティでは先生方自身がとても楽しんでおり、先生の笑い声を聞きつけ、生徒たちも混ざりたそうに窓の外から眺めている姿も見られました。

また、シェンクワンの既設の図書室へのアフターフォローも行われました。図書室が機能しているか、本が読まれているかをラオスのこどものスタッフが視察し、アンケート調査やアドバイスをしました。

インターンとして同行した私は、日本の活動・支援が多くの人たちを経由し、子どもたちへ提供される、その過程を知りました。目の前の自分にできること、をひたすらこなしてきましたが、こうして沢山の本を学校に提供でき、先生も生徒も本を手に取って、食い入るように読んでいる姿をみて感動しました。一方で気になったのは、先生によっては煙草の灰をこぼしながら本を読んだり、気づかないうちに踏んでしまっている生徒もいたり、使われなくなった教科書が倉庫の奥で山積みにされていたことで、本を大切にする習慣が根付くまでには、今後も様々な働きかけをしていく必要があるのだと思いました。

大切なのは地道に一つひとつできることをすること、そして広めていくこと、そうしてたくさんの力が合わさって一つの大きな力になっていくのだと感じました。(塚本有布子／インターン)

届いた本をさっそく手にして読む

図書活用の説明を聞く赤ちゃんづれの先生

楽しい体験を積み重ね、学校図書室をメンテナンス

現在、ラオスの小中学校約1万校中約6,000校に図書が、約1,100校に図書室が設置されています。しかし、多くの教員は読書経験を持たず、読書推進の意義を実感できず、本にほこりが被って活用されていない図書室もあります。

2011年10月から2年間の計画で、カムアン県、サワナケート県、セコン県、チャンパサック県の南部を中心に、図書活動を強化するための教員対象研修や巡回訪問活動を進めています。対象とするのは、当会が過去10年間(1998～2008年)に図書室設置を支援した36校。生徒数は合計約2万人、教員数は約1,000人です。

まず、先生に図書の活用について研修をして、各校を視察しました。それをもとに、その地域の郡教育局の教育指導官とともに、それぞれの学校で図書活動が活発に行われているのか、停滞しているのか、といった評価を行い、活動状況を把握・共有していきました。

そして、定期的に図書室開放をしていない、あるいは図書の貸し出しが活発でない学校の校長や図書室担当の先生を集めて、おさらい研修を実施しました。こうして本事業の第1期が2012年10月に完了しました。

おさらい研修を受けるサワナケート県の先生

12月からの第2期は、おさらい研修に参加した停滞校を中心に訪問していきます。活動状況を確認し、困っていることがあれば相談に乗り、図書室運営の活性化を図ります。

読書習慣を持たない先生たちが子どものために読書環境を整えるのは容易なことではありません。しかし、楽しい、面白いという体験をたくさん積み重ねることが大切と考え、物語をもとにした劇づくりや、ゲームを取り入れ、子どもたちから、「あのおはなし読んで!」「あの劇またやりたい」とアンコールが来るような図書を使った授業、図書室運営を先生ができるように第2期の活動に取り組んでいきます。(秋元波)

支援:外務省 日本NGO連携無償資金協力「小中学校における図書活用強化事業(第1、2期)」

リコーダーとチアダンスを教えたインターンシップ

8月13日～25日の2週間、私たちはヴィエンチャンの事務所と子どもセンターでインターンシップを行いました。「子どもたちに、みんなで何かを作り上げる達成感を感じてもらいたい」という想いで、リコーダーとチアダンスを教え、最後には保護者の方々を招き発表会を開催しました。

このプログラムを経てわたしたちは、子どもセンターのような情操教育を通した心の成長を目的とした教育施設の有効性を強く感じました。教育の量的拡大を中心として発展していく中で、心の成長というのはどうしても軽視されがちという現状があります。しかし、自己を表現することや達成感から得られる成長というのは、生きていく上でとても大切な力となります。「ラオスの教育が発展する中で、知識をつめこむだけの教育ではなく、子どもたちの心の成長も大切にしていってほしい。」

わたしたちはインターンシップを通して、教育のあるべき姿について強く考えさせられました。

(加藤香具弥　佐藤歩実　堀口菜奈子　山下悠／学習院女子大学)

事務所のこども図書館でリコーダーの練習

ラオスの絵本作家へのインタビュー

『カンパーとピーノーイ（孤児と小さなおばけ）』の作者、ドゥアンドゥアンさん（以下、DD）にラオスでインタビューしました。

Q：昔話の『カンパーとピーノーイ』を書くにあたって何かもとにしたものはありましたか？

DD：バイラーン（ヤシの葉の古文書）に書かれている詩をもとに現代文に起こしました。

Q：絵本にするうえで苦心したことは？

DD：オリジナルはとても長い詩です。韻が踏まれ、言葉選びが興味深いのですが、現代語でその魅力を伝えるのは難しい。かつてはいかに平易にするかを考えました。今は詩をそのまま使っても子どもにとって楽しめるものが作れるのではと考えています。

Q：昔話と絵本について、いかがですか。

DD：昔話はその国の文化や歴史を知るものとして、とても重要ですが、まだラオスの絵本は質が良いものではありません。これからもっと良いものを作っていきたいです。

(高倉浩樹／ボランティア)

＊ラオスのこどもホームページからインタビューを聴くことができます。

『カンパーとピーノーイ』から

日本発

＜出版プロジェクト＞

●学習院女子大学のご支援

絵本『ドデカあたまおばけ』
作・絵：アンバントーン　ペップンポーン
部数：3,500冊

2011年11月に開催した「おはなしづくりワークショップ」参加者の作品。夜更かしする子どもを一晩に100人食べると不死身の命を手に入れられるドデカあたまおばけ。夜更かししている子どもを見つけてはパクリパクリとお腹の中に放り込んで、ついに100人目の子どもをパクリ。でも大人も食べてしまい、お腹が破裂。子どもたちは逃げ出すことができましたとさ。

『ドデカあたまおばけ』

絵本『外国のむかしばなし』
訳：ダリワン　シパサイ、ヴィワン　チャンタコッなど
絵：カンケオ　シマナ、ドゥワンデッ　チャンタマリなど
部数：3,950冊

学校の先生から「子どもたちは『おおきなかぶ』が大好きで、ボロボロになった。新しい絵本が欲しい」などリクエストの多いおはなしを集めた民話集。「おおきなかぶ」（ロシア）、「三匹のやぎのがらがらどん」（ノルウェー）、「てぶくろ」（ウクライナ）、「石のししのものがたり」（チベット）、「どうしてネコはねずみをつかまえるの？」（ベトナム）、「小さい小屋」（ロシア）の6話。イラストは10～20代の若手が個性を競い合っています。

『外国のむかしばなし』

＜イベント＞

10月6日・7日　グローバルフェスタJAPAN2012
10月20日・21日　よこはま国際フェスタ2012

東京の日比谷公園、横浜の象の鼻パークを会場に、活動紹介とラオス料理や小物の販売をしました。「ブースを訪れる人たちとラオスや会の活動についてお話できることが楽しい」とたくさんのボランティアがイベントを盛り上げました。ご協力ありがとうございました。

よこはま国際フェスタ2012

「勉強会」報告

第14回「ラオスのむかしばなしと絵本」

多くの民族が生活するラオスは様々な言語・文化によってお話が語り紡がれてきました。ラオの人々の話を会の勉強会チームが、クム（カム）の人々の話を東智美さん（特活メコン・ウォッチ／一橋大学大学院）が紹介しました。

ラオのお話は、子どもたちに人気の『カンパーとピーノーイ（孤児と小さなおばけ）』、『カンパーとナンガー（孤児とその妻）』です。2つは続きもので、ラオスの中でも民族を超えて似たような話があります。ジャングルで友達になったピーノーイ（小さなおばけの意）やおばけたちと一緒に田畑を耕して生活していたカンパー（孤児の意）のところに、美しい娘ナンガーが現れます。2人はピーノーイと一緒に仲良く暮らしました・・というのが『カンパーとピーノーイ』。『カンパーとナンガー』では、ナンガーを気に入った王様が、自分の嫁にしようと、カンパーに闘鶏、ボートレースなどあれこれと企てます。しかし、ピーノーイの活躍で、2人は平和な生活を取り戻します。これらの絵本の作者へのインタビューも紹介し（p3に掲載）、文化的背景などを探りました。

クムのお話は『フクロウとシカ』。クムのおばあちゃんが語る映像を紹介しました。フクロウがシカに悪さをし、それがカボチャ、おばあさん、ニワトリ、ヘビ、アリとつながって、つながってたくさんの動物たちに飛び火します。主に森や川の近くで生活するクムの人々の生活が垣間見える話です。映像は東さんがクムの村で撮影したもので、夕飯を終えた子どもや大人がおばあちゃんを囲い、民話をみんな楽しそうに聴いていました。しかしこのような習慣はテレビなどの普及によってみられなくなり、おばあちゃんは「自分は目が悪いからテレビが見えない・・」と話していたそうです。民話のおもしろさや開発に関して考えさせられる内容でした。（中川真規子／ボランティア）

『カンパーとナンガー』

クムのお話

表紙の写真

絵本の一場面にある、聴診器を使って心音を聴きました。心音が聴こえると笑顔になり、みんな口々に「トクトクトク」と自分の心音を声に出して言っていました。私は8月から11月までラオス事務所でインターンをし、ワークショップや会議に参加、地方の学校への出張にも同行して、支援の実際を見てきました。ラオス事務所のこども図書館で日本の絵本を読んでいる子どもたちに、その絵本がどのような経路をたどってここに並んでいるのか知ってほしい、そして日本に興味を持ってもらいたいと思い、写真や動画で紹介し、日本で行われている「ラオス語絵本プロジェクト」を、『いのちのおはなし』（作：日野原重明、絵：村上康成）で、子どもたち自身に実施してもらいました。（塚本有希子／インターン）

特定非営利活動法人　ラオスのこどもの目的は、
子どもたちが自らの力を伸ばし、人生を主体的に選択でき、
公正で平和な地球社会づくりに貢献することです。
教育が十分に普及していない地域のひとつラオスで活動し、
ラオスと日本をはじめ子ども、人々の参加を通じて、
だれもが成長の機会を得ることをめざします。

ラオスのこども通信 56号
2012年12月発行　　編集人：森 透
発行：Action with Lao Children / DeknoyLao
（認定）特定非営利活動法人　ラオスのこども
〒143-0025　東京都大田区南馬込6-29-12 ミキハイツ303
TEL/FAX 03-3755-1603
e-mail：deknoylao@yahoo.co.jp
http://deknoylao.org
都営地下鉄浅草線　西馬込　南口下車　徒歩7分
郵便振替00140-6-462494

これからの予定　2013年1月～6月

2013年も活動ミーティングを奇数月、勉強会を偶数月、それぞれ第2土曜日に開催します（一部異なる日もあります）。

＜活動ミーティング＞
現地報告、国内イベントの打ち合わせ、会の運営の意見交換などを行います。
1/19、3/9、5/11

＜勉強会＞
2/16、6/8
＊各回とも内容は企画調整中です。日程とも変更になる場合があります。内容や会場とあわせ、詳細はホームページでお知らせします。みなさんの参加お待ちしています！

＜ラオスのお正月　ピーマイ・パーティー＞
4月にラオスの新年をお祝いするパーティーを開催予定です。詳細は決まり次第ホームページなどでお知らせします。

メコンのほとり祭

タートルアン祭り　そこは、日本にあって、ラオスそのもの

11月24、25日、在日本ラオス文化センターで開催された「タートルアン祭り」に参加してきました。「タートルアン祭り」とは、旧暦12月の満月の日にラオス仏教最高の仏塔・タートルアンで行われる、ラオスでもっとも重要な宗教行事の一つです。この時期には全国各地の僧侶がタートルアンに結集し国民とともに祈りを捧げます。

神奈川県愛甲郡愛川町にある文化センターはラオスのお寺の役割も兼ね、在日ラオス人の人びとが集います。祭り当日はラオスから招いた僧侶3名が仏壇の前に座り、参加者は読経に耳を傾けていました。托鉢はお寺の外で行われ、お菓子などあらかじめ用意しておいたお供え物を寄進しました。規模は極々小さいものの、人々が熱心に祈祷する姿、読経・托鉢の後に皆で仲良く食事をする様子は、ラオスで見た光景そのものだと感じました。（冨田奈々江／ボランティア）

在日本ラオス文化センター。ラオ寺とも呼ばれる。